

4・5 討論会 状況

藤田 若雄氏 ユカこんで

【司会】 一つは、私たち京都労研は、新左翼の労組組合をつくらうてはどうかという呼びかけのもとに昨日の集会をやったわけですが、私たちが今日つくらうとすると労組組合というものは、総評とか同盟あるいは中立労連といったところの現在の労組組合は、労組組合ではないんだ、という前提に立つておこなう組合運動であるわけなんです。さついで意味では日本の労組運動史の中でも非常に、かつて経験のないような運動を開始しようというところまで未知数のところが沢山ある。また、藤田先生のおっしゃる誓約集団という形での結果はかろうという場合には、従業員組合といった形で経営者にまもられ、あるいは体制に擁護されたといった労組組合運動ではなくて、まっとうからそれと対決するということもつづらうことは明らかです。私たちは昨日大衆的に呼びかけをやりましたが、それ以前から今日の懇談会を呼びかけるということもきしなかつたのは、権力との関係など含め、しなかつたということとです。今日の懇談会に続き労組結成へ向けに具体的に展開していきたい、たいと思います。昨日一五〇名程の労組者が結集したわけなんですけど、今日ここへ来られた方は、わかりにくい場所を捜しあひだになったということからいっても、オ一階の誓約を具体的に開始した部分であるというふうに考えたいんじゃないかと思ひます。私たちの運動は、最初から多数をつくるあるいは多数派となつていった形の運動ではない、非常に少数の運動であるということも前提にしながら、しかもあかつ労組者の真の運動であるということもきかすまなながら運動を展開していきたいと思ひます。今日は先生のおかちお話しをいたさうというつもりもあつたらう、皆さんのおから、現実の労組者の状態はどうなのか、その中で誓約した集団というのはどういう位置をもつのか、というあたりを重点をあてて討論していきたいというんじゃないかと思ひます。まず藤田先生のおから昨日の講演の骨子だけをおさるでもう一回懇談に入りたいと思ひます。

【藤田】 昨日申しあげたことは、今日の労組組合というものはどういふ向題に当面していかかということ、根本的に言えば、従業員組合というものをきかすまなかなければ、労組組合としての本来の性格も果てなくなつてしまふんじゃないだろうか。さういふ意味で組合運動の例にとつておれら新運動をどうおこなふ必要がある。昨年の10・11頃からおこなつていける向題をきかすまなると、誓約集団を作つたと思ひます。さうすると、よく向けるものですが、じゃ何がおれのかというふうにはおれませんが、さし当つては政治的支持の活用とかさかちから政治運動の自由であるとか、さういふことがさしあたっては

考へらるるものになつてきました。今日の課題がさういふふうになつてくるやうなところまで
きた。さういふハルキ土台にして今日は話しをして丹之はどうだウラカ。

Ⓜ よくいわれることなんですけど、戦后、日本には労組組合運動はなかつた。今まで
労組組合と呼ばれていたものが名前と実体とは全く別物であつた。いつてみれば別物であ
るにもかなわらず現状まづまづなりました。だから労組組合が名前と実体が一致しなければ
ならぬといふ主張だつたと思つたんです。さういふ中味とは何かと言つたら誓約という
ことだといふこと言われぬと思つたんです。誓約というふうにした場合に、昨日の
講演では、その誓約の中味を言つたとだんに反対物に転化するといふふうに言われたいと思
いますけども、じゃ誓約といつた場合に、言葉ではよくしきやめの実践的な課題であると
思いますが、誓約とは何かといふそのイメージとしてもう少し聞きたいんです。

藤田 あのをつな会場ですなう非常にきめつけた言ひ方なんです。ひびつきあ
わすつた労働者会であれば説明は、まあくやれるわけですけどもね。印象づけきはつきり
やるために言つていふわけなんです。労組組合の模範を日本の粗粒は全然果してこなか
たといへばこれは言ひすぎなんです。言ひすぎだけでもあつたところまで今日の向題を強
調するためには、だめだつたんだとこつ言ひ切つてしまわんとね、はざれが悪くためな
んぞです。20%ぐらい言ひだしたんだといふのはだめだからね、きめつけちゃうんだ
さういふことと板にパーセンテージにとつてみりゃ20%30%、さういふ役割は瘦じていた
と思つたんです。だから私をわが三〇年代に入つてくるときは、早功序列がくずれる見通し
がなつたわけですから、さうだとすると企業別組合でも何とかもりたつて役割を果させな
きゃ崩れましようといふので、取組斗争といふ言葉で北陸鉄道とか三セセ労組のやつてい
るとき紹介してたんなんです。それはそれごよかつたと思つたんです。しかし今日の向題は、
早功序列はくずれましようといふ見通しは立つていふわけです。そしてそこで生産性会評
というふうな運動が本々まくなるといふことになれば、もう労組組合なもていつていふ向題
はない。もうダメだと言ひ切つてしまわなければだめなんです。さういふ向題を立
ちあげなれんです。もう一つは今會向にあつたやうに、誓約といふのはやっぱりイメージ
キキミにくくおと困るといふことなんです。私はさういふ経験があるんです。北陸
鉄道も三セセの取組斗争の実態調査をやつて、さういふふうになつて下からぐきあが
つていくのが取組斗争なんだといふことを書いたのです。するとたいていの粗粒は、取組斗争を
クと後援者はキキヤつてしまふ。上からヤつてしまふのです。私がいつたやうなことを運動
方針の中に入らう、粗粒でもさういふやうにやつていふのは、さういふわけなんです。

こういうやり方というのは非常に多くある。例えば組合を作るとしますね、組合規約をどこかのまねして作ってね、「皆さん、やりましょう、異議ナシ、異議ナシ」、パチパチと手をたたくいてそれでカッこつけていくわけです。何をやってもマネオウやうわけです。だから私のはっきりイメージに浮ぶようなことをいうと、それはけっこうです。つて、何の抵抗もなく自分の組合の運動方針の中に盗用する。そうならいかんから、言わんわけですよ。しかし、かりに京都地方で何かできると思えば、私としてはオマにいて話しやすいわけです。こういうふうにしてきたのですよといてね。なるほどというわけです。たゞ、こゝでまた非常にあぶないんですよ。それじゃわかれ水も作ろうかというわけで、文書をかりて、紙だけ流す。中身はできていないという二になる。そういうことが今後起ってくるおそれがある。これを防がねばならないから昨日のような否定的ないゝ方しかできない。私から具体的なイメージをあたえるのはまずいんじゃないかな。

MI 作りあげていくものとしての誓約であるということですね。今までの運動とこののが、上からのものであるし、上で指令を流せばこれに依りて動くというものであつたけれども、動員一ツをとってみても、何かあるから行けということになつてしまふ。そこでは自分で選ぶとつてデモに出ていくという状態ではなく、デモの権利さえもマツ殺してしまふ。では、自分で選ぶとつてデモに出ていくという形を作り上げていく、さう

いう労組組合においても、一番ポイントとなるのは、その誓約をどのような形で保障していくのかということだと思いますが……

藤田 だからね、こゝから先は多少イメージが浮ぶと思うけれども、今度反帝労組を復あげてみたらわかると思うけれども……さうとつりやりなさいというのではありませんよ。例えばの話ですよ。反戦のシンパをもってね、反戦のシンパ組合だというふうに複上げ、看板あげをするとする。そして組合費を納めてもらうんだといったときに、俺は組合費なんかお金のいやだといった誓約にならないね。組合費はつづけて納める。もう一ツはシンパということにらまゆるわけです。にらまゆるということ、組合費を申しぼして納めるということ、この二つに耐えらゆる人向を集めるということ、いんじやないですか。さういうことに耐えるということが誓約の内容になるとわたしはいうのです。AとBとCの三項目を約束するということになるとね、これは一パン約束したんだ、後は少しボヤボヤしているかもしんけんけど約束したんだということに終つてしまふ。組合費は月々納めなきゃならんということでは、つてあると続かないと消えちゃうわけです。そこではじめ百名ぐらいで出発して半年で五の名になつたとすると、歩どまり

五の名だぬ、五の名位のところは本堂の底辺であって、そこが本物だということになる。

やはり持続するという要素をいれておかないと具合わるい。それからはじめから正しい効果のあることができないということですね。今は五の名であるが三名であるか何名かしらないけれど……。あまりお返しは帰ってくることは考えないでね。そういう意味で後衛運動だとか、反戦が前衛であるならば、反戦物組は後衛部隊であるくらいに考えたいと。中身を直接いっちゃまだ汚がされてしまつわけだからね。中身をいわずに両隣に何か言ふうとするから。モタモタしている。そんなモタモタしたのがなつてくるならいいから。うならそれで結構だと。モッぱら入ルメットなぶつて、ぶく面して、棒もつてか……。いいことだけおやんなさいと。それはそういう人ないって二つにいいわけだから。意味です。

私はオニ組合という本を昭和30年に出してね。よく売れたですよ。買った人から聞いてる。か。先生の本を賣つたらね。人に知らさんでおく。モッぱりとよんて聞かす。にいて書いてやる。わたしの方はなるべく印被がよけいはいつてきたらいい人。みんなに改訂してくれといつてもいいんです。だからさういふつにどうも。まあいいだね。

誓約というところばくせんとしているのではないかな。皆さんの方をと改訂し。いう部隊でたくさん集まつてくるが、東京の中核の話なんか聞いてみると非常に面白い。という話ですね。そういう流動的なところではこういう後衛部隊はできないんですよ。ちゅうなわつていけるわけだから。二ヶ月が三ヶ月はいつてハネていけるけれど、後衛はトーンと落ち出てこないんだから。

司会——持続性の問題からいって、少くともわれわれの属している労働組合は戦後のも続いている。なぜ続いているのかという問題と、もうした労働組合ではなして、なぜわれわれが誓約集団を作るのかという問題があると思います。現実に僕らが経験した労働組合運動の中で僕らの位置を明らかにすることが必要だと思つてます。

下——組合にしろ、いろいろは組織を作つていく場合に、つねに一方では多数を占めていくという問題、一つの時代の流れの中で影響力を拡大し、過渡的な結果がなるとしていく中で発生する問題として、とりわけ労働組合の中で強いつつていくと、多岐にわたる問題に多数を経験していくということになる。それと同時に内容の問題が内々、その人のなかへいってどうに考えておられるのですか。

藤田——多数を獲得する場合ね。二つ、タイプがちがうでしょう。企業の中に鉄道の

組織をつくる。従業員組織をつくることまで、はじめは少数派をつくるわけですから、一度で済ませれば別ですけどね。中小企業を考えてみれば、けど、経営者が組合にくるのをいやがると、さういう中で作っていくときは企業別組合を作るんだって大変ですよ。その中で企業内にさういう拠点を作って、これをこんどは多数派にしていくという問題があるわけです。多数派になるか、多数派運動というのはさういう企業内組合を多数派にするかという問題と、地域に組織を作って多数派になるかとはだいぶ性質が違いますね。言葉でいえば両方とも多数派ですよ。けれど地域に組織を作った場合は、これは個人オルグですね。個人加入のオルグしかできないわけですね。ところが取場の五に拠点作った場合は、一挙に拡大するという多数派運動があるわけです。賃上げなんかの場合、こっちは組合が土台になって、春とかに賃上げ運動をやりはじめたということになると、これが大いにこねて、ストライキに近いようなことを一部分の人でも、生産行程の非常に重要なところをつかまえてやってやっつてね効果があると、いうようなことになるね、他の連中、一挙に入ってくるという問題がおこるんです。だから、今日まで日本である組織運動やって多数派工作をやるとか何とかいう問題を立てた場合に、だいたいは企業内の多数派工作の発想ですよ。すると、これは個人が自発的ということではないんですよ。何かの機会に、あ、それは利益があるなあと思わしといて一挙にバツととってくるというト綱を投げた魚を取るようなもんだな。さういう方法での多数派工作といわれている。だから、皆さんが、反帝労組を作った場合、私はこんどは、やはり組織は大きくなうなまや、意味ないんだから大きくなうとするとしよう。長い目でみればね。しかしその場合はトアシ張ったような形ではできないんです。だから、イギリスやアメリカの労働組合の幹部が一軒一軒まわるといようなことをいわれているが、その方法でしか多くできないんです。成果をこんど上げたから、なるほどあ、いう場合はい、からオレもさううなんていつて入ってくるのもあるけど、それはしかし、取場の中で多数派いっぺんにとるのは大分ちがう。さういうちがいは承知しておかないといかん。

だから今までのようなセニスで多数派がとれるんだと思うとね、大きな思いちがいますんじゃないかな。だから、企業内組合の中で多数派をとるといのは実は多数を支配するということなんです。押えつけてしまおうということですよ。押えつけてから、また組合分裂したときに、一挙にはじき出されてしまつてね、長船みたいなね、あ水というまに、この向まて一万人の執行部の中で大いばりしてたやつが、一挙にやられてしまふんです。さういうとんでもないことが起るわけです。それはちがうでしょうね。今後は。

「——そういう意味では、企業なり、一つの産業の中における組合—労組組合ですね。そういう、とりわけ日本みたいな所ではですね。数を、僕らが志向するような方法では多数は獲得できないという問題として……」

藤田——むしろ腹決めといった方がいいんじゃないかな。腹決めといった方がいいというのはだよ、フランスの例をとってみても、労組組合の組織率というのは30パーセントですね。日本よりちょっと低いぐらいじゃないですか。非常に少ないんですよ。日本はあれでしょう、組合があるところは会社でしょう。組合があるというほとんど100%組織している。それで全体で30パーセントでしょう。フランスの場合だったら個人加入ですからね。一つの会社の中に組合に入らない奴が相当いるわけです。ストライキやるというのは、こんどはストライキというのは組合員だけがストライキやるんじゃないんです。フランスのストライキは組合に入っていない奴がせいにやってくるわけですから。

「—— 五月の場合は、とりわけ組合が押えたということでしたが……」

藤田——あれはまたちょっと、異変事態だから……(笑) ぶつういわれているフランスでの何年間に一度ずつ賃金のゼネストあるでしょう。やるんですよ。その場合もオルグ方法というのはだいたい、ストライキやるのは組合員だけではないという考えですか。フランスに行ってきたんだ、私に話したのは、フランスの組合員というのは日本でいけば組合活動家なんですね。ストをやるときには、組合活動家はもっと活発なストライキのやるようなオルグをやる。日本みたいに毎年やらないです。その代りね。毎年やるからストライキがストライキでなくなるわけですよ。アモもね、しよっちゅうやるから、アカサビのアモになってしまっわけですよ。割当てやらなキヤあつまらんといいことにな。ちまうんですよ。ストライキやるというときには組合に入っていないやつがやっぱりストライキやりやってくる。組合員が中心になってシンパひくくるめてストライキに入る。一産業のうち何パーセントストライキに入ったという報告であってね、向こうの新聞の出方は。だから、これからはそういうふうな形に日本も変らなきゃ意味がないんだということをおは頭に置きながら言ってるわけですよ。(次号につづく)



だから、そういう法律のあることを知らないと決定やるでしょう。ところが今度は雑誌の中—私は今度雑誌を本しますが、反成系労組運動というものはつきりしてないから—この雑誌がないわけですよ。その雑誌を本すんです—でそういう試論をやります。そういう裁判例でもおればそういうものを本していくということをやります。そういう内争過程になるんじゃないかと私は思っています。一〇〇名のうちの三名であったとしてもチャレと主張をし、自分でもモキとるといふことをチャレンジとやってあげば、それは必ず閉じの積丹重箱になるわけです。一人や二人が言ったことだからほっといてもいいや、というんことはダメなはずですね。

A—僕ら一番最初やる気もって執行部になったわけです。それで一番固るのはズブな素人なわけです。だから色々意識的に知っていたわけです。ところがそれに対して何にも指導がされないわけです。いややな組合の先輩といわれながら、指導も学習会も何もしないわけです。それぐらいきなり執行委員会などという形が生まれてくるわけです。何も知らないのにやまっくるるわけです。それじゃしかたないというわけが色々個人的に勉強したり、反成系がこういふところから結構は指導するなという形にまっくるるわけです。中では全然指導してくれないわけです。まっくるるや互に回りに指導しあう感じになるわけですね。

藤田—指下している、それは労務課だと思っつけばいいんだから、執行部というものは、オの労務係だと思っつてまっくらがない。だから長年生きてもうわけであつた。終成府全部が労務係じゃなく、内閣の組合だつてあるだけ。それだつてつづきやれましてうわけくす。だから指導もなしにまっくら、とにかく金と。これあれキレていく、オの労務係だけのものだけが長くつづいていく。もう命なんでもはないです。それには。

—という意味では、現在の総評民間にしろあるいは同盟にしろ、そういう組合の中で内閣僕から自身の界、イキ役割というものは、僕の影響力キとれただけなわけかという問題ですね。それキーン、物質的基礎として、勝った負けたというものはある意味ではしかたないというものなんだ。それじゃその物質的基礎をどういう形で結びつけていくかという問題は、具体的にはやはりもう一つ、権力の問題というのに到達して行くのではないかと思っています。そういう内閣先主がいておられる労組組合—ここでは反成系労組といわれたいまはすげーそれは一番底辺、一番ゆるやかな、一番低い次元での粗松として考へられていかなんじやないかと思つておすだけ。



一番カッコの悪いことをやりたがる人はいない。そうです。今はそういう一番、程度からいうと低い、革命が一番最高だとすればだよ、一番低いというけれど、その低いのさえないんだからね、今は。優等生ばかりなんだからね。一番カッコのいいところはやりたいて、これは希望者はたくさんある。一番カッコの悪いやつはやるうとする人がいないわけだよ。

—T— カッコいゝのも希望者はあまりないけどな。そういう意味でいえば、両方いいわけでは

—藤田— 昨年の十、十一月斗争の総括をやりかゝったとき、聞いたら、なかなか負けたとはいわなかったもんね。「情況」でやったが、とにかくみんな体があるから、夜通しやるわけだよ、僕はもうダメになつて倒れまゝで、その水で時々起きてきくんだけれど、負けたといわれないものね。あーリップバなもんだな、負けでも勝つんだなと思つてぬ。いまはやつと負けたという人もで、きていますかね。しかし、全体としてみれば、そういうこともしれません、なかなか急にいえないもんだ。

—M— 今の組合の中では、斗つたら処分される。だからその前に処分されるよりも斗かわないというふうな形でいわれてくるわけです。たとえば十一月三日のストライキやって処分が出てくる。処分反対斗争をすれば、それに輪をかけてまた処分が出てくる。そうだとよけいに勢力をそぐかう、それよりも最低限度の所で妥協して処分を最低限度におさえる、これが一番いゝ方法だといふぐあいに説得してくるわけです。それは処分というふうなおどしにかけて、組合幹部自身が斗うなということをしてくるわけです。一般組合員としては、それじゃ処分されるよりも、それをのんだ方がいい、という具合になって、何もなく終つてしまふ。それでは、どういふぐあいに、それを切り崩していくかといふ……

—藤田— その水はさっき言ったように、あなたが、街頭に出ていってあんなだけのことをしといつて、それがなおかつ資本の側が処分しないなんて思つてるのがまちがひなんだよ。

—M— それはいいわけですよ。何を言つても無力なんです……

—藤田— その場合ね、あなたが、資本は敵なんだから、敵がこつちを処分してくるのはあたりまえなんですよ。処分しないなら味方のはずですよ。問題は何かというと、組合が我々を二重にパージするのを防がにやいかんわけです。資本が、こちらがハネたらたゞきにくるのはあたりまえであつてね、こつちが力持たなきやあはねかえすことできないわけですよ。たゞ力を持つとすると足引張るやつがいるわけです。組合が二重にパージしたりするから、これは防いでいくということをやらなければいけないです。

―M― ソコですぬ、僕自身もパージといったらおかしいですけれども、組合費だけとら
れて、権利停止というかつこうになっているわけなんです。そこを政治活動の自由とい
うようなものの、いわゆる執行部に入ってやっていくと活動する面で有利さがあるわけ
ですぬ。

―藤田― だから、組合は従業員組合、経営協議会ですよ、本質はね。君がゴクトに属
して斗かうということについてはよしあしをいわない、権利停止なんていう処分しない
、君に対しても処分しないし、民青がやっても処分しない、各セクトの行動は自由であ
るといふことを、君の組合の中で確保しなくちゃいけない。つまり、君の頭の中で、そ
のどこを経営者が処分するのはけしからんという頭があつてだよ、しかもゴッチャにな
るから、議論がゴマゴマになっちゃう。資本家は処分しますよ、君ははい、たいほうだ
いっているのだから。

―M― え、それはもうしない方がおかしいです。それとまた、組合で処分してくる
のだからいいし、それじゃ、そこから、どう切り込んでいくかということのものか……
―藤田― 切り込みはたつて、まず君が発言すりやい。権利停止か……、権利停止
なら、君の仲間がいるだろうから……、永え権利といふのはないだろう。

―M― 永えにはないけれど、可能性としては、今度は除名という手の方が多いのですが、
―藤田― 除名なんてできっこないわけですよ、相手が君を除名したりするのは、相手
がゴニゴニ労働部であるから、そういうことをやるわけですよ。政治活動は自由で、憲法で保
障されているわけであつて、組合でないものが組合員を処分することはできないですよ
―T― そこで問題になるのは、日本の場合、憲法に保障されているといつても、そつ
う形で政治活動をしたら、あるいは取柄の中で自分の主張を展開し、自分の政治主張、権
利主張を展開したということ、資本家は処分する。同時に組合が権利停止なり、あるい

は組合が除名するということまでやっていくわけですよ。そつした場合は、じゃ、僕たちが、
それに対してどうとしようとき、当然ビラをまき、個人的オルグを含めて取柄でやるわけ
でしょう。あるいは反戦の部隊を導入したりして、門前ビラマキとか、それに対するデモを
かけたりするわけです。しかし、そついう組合の除名なら除名が、厳しくなる事実とし
て目の前にあらわれくるわけですよ。そついう時、地労委なりに提訴するといふことが考
えられるわけですが、ほくらは現在の社会ではそついう形では処分できないといふ構造に
なっているんだということによつて立つのが、それとも、もう一歩こえて、憲法も法廷も
資本や組合に有利な決定を出すこともあるのだといふところに立ってやるのが問題にな
るのではないですか。

「反帝労組」の主張

藤田——さきほど申し上げた通り、今議論にならないうのは、新しい組合がなかったからさのつみかさをいわけず。リースが新しいから、だけでも今回の法廷闘争キツクかさをいけるという可能性を排除する必要はないです。だから政治行動キツク除名した、組合の決定に反してはなから除名した、会社がもうこれと首切った、と二ついうことをキツクしたラビはユニオン・ショップの適用の誤りだということ、今度は裁判でキツクする、さきの法理論を我々は確立していかなければいけない。そんなものは手ぬるいんだ、もう実力ごぶつとばしてしまえなれだといったってね、ぶつとぶもれずか相手は。意気は社とすべしですよ。でもね、政治運動として考えたってそれはシユプレヒコールみたいな運動ですよ。さついうものはキツクたっかまわらない。けれども長期的にすれば権利を獲得していくところへ可能性を用いてみかると具合わるいじやないの。さついう法理論を我々は展開して二つと考えていけるわけですよ。

——それは現在遂行している、基本的には遂行しようとする法理論に対するかところのある意味では防衛的の性格ですよ。法理論を作っていくこととするのは、さ、それは一番低い次元での、当然必要なことですよ。さ、さついう運動の物質化の問題として、反帝労組の「反帝労組」というのが、さついう精主体として考えられるということなのですか。

藤田——考えられるというよりも、結果体が大きくなるのはさついう法理論も明白な形であらわれぬ。さついうものがどこまでいけば頭の体操みたいな形でしか議論はできない。さついう粗筋がどこまで現実になつていこうと問題キツク起したと二つことになれば、これは法廷闘争に現実になるわけですよ。

M——反帝労組を結成したらというものの、現在の組合は規約に違反して処分してくるという事態があるわけですよ。組合規約がこうなつてなれば、おかしな話じゃないか、といったところ、組合自身が処分してきているから、何キツクかさで一蹴されちゃう。

藤田——だけでもそれは裁判になつたらさつはいかんというのですよ。組合と云ったって、組合は組合員のものであつて、組合員が政治行動しちゃいかんなんぞと云えないです。無効ですよ。さ、さきほどいふことを言つてなわけだから、そんなことは無効だということキツク判ごキツクもさつうれですよ。こっちはさついう権利をたかいたと云わけですよ。

「法廷斗争もやりやい」

— M — その次元では、やはり法廷斗争をやりやなけりやならんというのですか。
— 藤田 — やっていいというんです。法廷斗争なんて意味がないなんて、そんなこと云わんでもよろしい。法廷斗争もやりやいいし、お前けしからんのだといたたりや云ってもいいし、両方あってどうしてわるいのかな。

ただ、裁判やった場合にね、学者の中にもいろんなやつがいるだろうから、私のような意見の学者もかなりいるんじゃないかな。労組の中、政治活動はそれぞれの政治セクトが自由にやればいいことであって、組合がそんなことに反対なんかだとか、よけいな口出してるのはい、はいいるんだよ。組合でないんだからね、そういうことを通じてから、今度は、従業員組織みたいなものはいけないんだというふうにしていかなきやい人。

— A — 今回の春斗でもものすごく感じたわけですが、いままでは少くとも、僕は組合の一部だと思ってきたわけです。ところが、今回なんか、組合という一つのタガみたいなものがパツリ浮き上ってきた感じがするんですね。組合、組合といっているのは、何か解があつてそこに執行部がチヨコ、チヨコしている。彼らがこれが組合だと云つても中身がちがう。

— 藤田 — チヨコ、チヨコとしているのは、組合といいながら、実は会社の別働隊なんですよ。

— A — M君がいったので思うのですが、組合員と組合とは別な感じがするのですね。

— M — 自分のものとして、組合とは何かということがとらえられないと思うんです。自分のイメージとしてこういうものが組合なんだというものが全然ないと思うわけです。その点では逆に民間のオルグの仕方はすばらしいと思うわけです。そういう意識をもたせないよう教育をしてきたと思うわけです。

— 藤田 — 教育をしてきたというのは、今、労働者は繁栄ムードの中で、昭和元禄ムードの中でね、ズブ、ズブにおほれてしまつてるんですね。労働者は斗う、それはそうますけれど、ね、ことばで云えば、労働者でもたらしめないのがいい、ばいいるわけだからね、そのことをちゃんと考えていてもらわないと、労働者なら、Aでも、Bでも誰でも斗うなんかわけにいかんですよ。だから労働者をきれいにいいすきてもいかなんですよ。今はやっぱし相当にいかれてると。

— A — 自らを労働者と呼ぶ人間はまだましなんですよ。ところが今の組合幹部だつて、自らを労働者って云わないですよ。

さう、さう。あの口鉄、おもしろいね。あそこについて、労働者でないといつたんですか。恥辱ですといつたんですか。冗談いふといつたんですか。さういふ感覚です。

〃根拠地は地域に作る、

M——地域に拠点をもちたいから攻撃するといつたふうな相手をもち、といつたふうな一己を言われたんですか、感のどこですか、何か生産点でダメだったら拠点に逃げ込めよう、といつたふうな感のどこですか、いいえ。

藤田——いやそれはいけません。それは言葉の魔術にひっかかっているんで、生産点、なぐていふ言葉に酔っ払う、ころからだめなんでしょう。生産点だ、とこころに拠点ができるとは、いけません。だから信任に拠点があって、根拠地があつて、恥場には前線基地ができて、生産点だけ作る、なぐて考へはダメです。生産点といふ言葉使つのに酔っ払うていふから、相手は生産点に基地なんかつくらすはずがないんです。生産点とまっけてしまうでしょう。生産全部握られてしまうでしょう。根拠地がそんなところにならう。三也はかつてそれをやったわけでしょう。そんなことをやるからやられたわけです。根拠地といふのは、相手が完全に支配しているところで作つてはだめです。あつていふところで作らないうち、三二はせめて三二ないんだから。

M——地域的な形をとった拠点と、もう一つは産業別活動家クラブといふことを、いわれたいけれども。

藤田——たとえば京都の三二が仮にできたとするか。すると三二の中に国鉄とか合化労働の人があつたとする。それが合化労働の代表員に選ばれて合化労働の大会に本でいふときに、何も知らないかといつたう何も知らないといつたらめかしいと思つたんです。やっぱり合化労働の活動家クラブといふものを作るという考へていふたのがいいじゃないんですか。それで合化労働といふのは、オニ労働課の総指令部みたいなものじゃないですか。だか、らぎの中へセットで、奥には自由である、といふことと運動きとんとんあつていくべきではないでしょうか。

M——僕は〇〇組合に所属しているんですけども、だから産別活動家クラブといふこととそれはわかちなす。そのとき地域的結果をしながら産業別結果をすわという……。

藤田——その場合活動家集団の労働者の総連合といふか全体のナショナルセンターができたところと、産業別の原則と地域別の原則といふものはどういふ大会連合の中で生きたりするか。総評の中というところ、産業別が決定的であるわけ、大会ではあくまで産業別が決定的であつて、地域は京都地評とかはオプサーバーであつて、発言はできないけれど決定権はないといふ形になつていふ。しかしこれから作る労働組合では地域の方が決定に入つていふ産業別も決定には参加するようになる。産業別を主にするから、産業内になり易いわけですね。

—M—すると、地域別に作っていく、それが、いずれ出また段階で産業別も作るとすれば……

—藤田— たとえば、京都、大阪とさして二か三ヶ所出またとするね。三ツのものが集って大会になったとすると、その中に産業別の組織ってあるわけですよ。合化、私鉄もあるだろうし、大産別に考えてもよいね。交運共斗のようなものもあるし。そうすると産業別に決をとる問題は何か、地域を基本に入ってくる問題は何か、それは問題にちがうと思う。これは今一概に言えないと思う。実際の問題が起ってきた場合にこの問題は地域代表で決をとるとか、これは産業別に決をとって、こちらは意見を聞くということをやらなきあいなんというように非常に具体的な組合わせができてくると思う。ところが現在の場合にはこういうきめの細かさをやらずに非常に奇妙なやり方をやっている。

—M— 今は京都段階では京都労研が母胎になって、地域的な結果をはかろうと言っているわけです。それともう一つは内部で何名が集って、そういった問題をやっていこうというふうな段階なわけです。そこで地域と取場との関連はどういうふうにあるべきか。

—藤田— それはどっちに力を自分はおくべきか、そういうことを聞きたいんじゃないの。私かどっちか言ったら、それに力を入れようとしているんじゃないの。両方上手にやりたいたいな……

—M— 両方うまくやってきました。地域といえはイメージが湧くのですか、それか一方、産業別といった場合に、産業別の原則もあると言われたんですけど、どうなんかなあ……

—藤田— たとえば地域という意味で言えば、反帝労組組合ができるのですれば二重加盟になっちゃいます、そうするとあなたの方が作った組合では少数組合だから、地域の少数組合として守りをしていかねばならない、今までの組合にも入っているわけで、その中では、まず最初の任務と言えば、さっきも言った各セクタの政治活動は自由でそれをパージしないようにしてはいかん。そういった場合、あなたはどこでやるかというところもある。〇〇はそれを関西だけでやるかどうかかわからんですね。だとすると、有無を言わず産業別の組織で活動をやらないと実現しない。あなたのようなところに入っている人はそういう課題は当然、産業別でも自分のシベをつくりながらやっていかんとできません。関西だけに会社のあるような、一企業一事業場のようなどころであれば自分の組合だけ、そういう方針はとらせることはできるわけですね。それだったらいきなり産業別という大きなことを無理に考えなくともまずやる。そういうことではないかな。理論上の問題としては誓約集団といったけれど、日本の新左翼の中に労働者評議会みたいなことをという人がいて何となく誓約集団はあかんもんだというふうな見方をしている人もいます。そういう人とも議論をしっかりとやりやらないかという問題が残っている。

—A— もし、産別一本で行く場合、産別に閉じ込めはもうブルジョアがひもをにぎって、
るわけで、そこにまきこまれるのを阻むために地区に根拠地を設けるのであって、地区を
拠地に産別をはじめてもすぐに地区の必要性がでくる。

—藤田— 産別を考える場合、合化労連みたいなものを産別と考えた方が良い。労働協会の
〇組合は産別とはいえないわけですね。全国組織ではあるけれど。一企業だ。だから、企
業の中では当然やらなきゃならない。やらなきゃ実現できない。こう考えたらよい。けど
合化みたいは企業がたくさん集まったところだと。産業別全体で、おまえとこで、こうい
うことをやった者をパージせよ。と、こうはならない。

—T— 何やかやと云ったって、資本家と一体となった組合でしかない従業員組合の中で、
活動せよという場合、自らの物質基礎をどうつくるか、という問題と、産別の中でかく
とくした労働者を何に結集させて行くかという二重的な組織活動の問題につきあたる。短
い期間であれば企業の中で多数を制することもある。又、執行委員会にできることもあるわ
けですね。あるいは支部長になることもよくある例ですね。そういう場合に、こっちもさ
っちもいかない。組合としての立場と、自分の政治主張の立場と、そういうギャップの中
で展望なり組織的な活動のスタイルというふうになつて……

これを極限化したものが長崎造船であったと思うわけですね。そういう点で、別な結集体
—より普遍的な結集体、僕らが獲得すべき労働者の組織—そこから規定した組織改造を下
から作っていくという、そういうような地域的な組合を作っていくか、と思つておるんでは
ないかね。

—A— ものすごく具体的なことなんですけども、産別の団結と地域的団結とどっちが本
物かという問題になるんですけど、いさ、オレらの取場を拠地として何か枝動隊と攻防戦
があった場合、他の産別の連中がマイクロバスを運ねてオレらを支援してくれるかとい
うと、これないわけですよ。いつも電報一本ぐらいですよ。これは枝動隊は迷げないか
ないわけですよ。

—藤田— アメリカや、イギリスの場合をとつてもあれは地域組織であった産業別組合とい
うものが地域別組織としてあるんですよ。その上に産業別の運動が起つてきている。積
み重なってきている。根本的には地域組織があるということですよ。組織問題としては、日
本ではそれがあるべきところはないんだからなあ。

—A— その結局創価学会が地域に拠地をもつというのを許してしまった。本当は彼ら
というのは反帝労組で集約すべき大衆だったんですよ。いつの間にか下部の労働者が全部
地域で組織されてしまった。

藤田——反麻労組をやる人は人生問題まで、ちゃんとやればね……。精神問題までやれば、創価学会なんですってんてしまう。これはやらなきゃあかんです。こっちはどういふことはやらないからね。

司会者——三時から、先生は大阪の方へ要請されてますので、この懇談会については、先生が大阪の方へ出発されてからも、もう少し京都段階で具体的に、この反麻労組を結集するための、もっと少しつ、こんだ議論をしておきたい。マキほど、藤田先生がいわれておるんですけど、我々の運動というのは、絶対に持続せなあかんというところで、そういう意味では、昨日の集会は一つのろしにしかすぎないし、又、大きなカスミあみではなかったのかと考えるわけです。であすこに集った人が全部、そのまま誓約集団になるかというところが絶対になりえない。現実的に今日、マキへ集っておられる方の人数をみても、いかに誓約という方向をとる、持続するということが困難かということも十分想像されるわけです。その運動を持続させる意味でも、反麻労組を結成するんだ、そのための準備を徹底してやるんじゃないか、いうことを訴えたいと思つんです。具体的には、来週の日曜日以降を毎回にわたって、この場所において、連続講座をもうけたいと思つます。これに因しては毎週日曜日で非常に困難でしょうが、しかし、これをやり切るところにおいて僕らの誓約の中身もためされるんじゃないかという気もするわけなんです。その間、出たり入ったり、場合によってはほとんどなくなってしまうということも考えられる。それも含めて、八回の連続講座をやっていきたいと思つんです。 へ以上 終り

発行 京都労働運動研究会

連絡先 京都市北区小山中溝町4のウ

中村太郎

